

あるふたつの転がるクビについて

人物

本木良二（36）会社員
本木水萌（35）良二の妻
本木里緒奈（13）中学生
本木彩（13）中学生
岡本和志（32）良二の同僚
服部直也（48）良二の上司

○ 本木家・リビング（朝）

キッチンで、忙しく料理を作る本木良二（36）。

本木里緒奈（13）が入ってきて、立ち尽くして、

里緒奈「ヤバい。遅刻」

良二、里緒奈に顔だけ向けて、
良二「今日、水曜だよ。朝練無いでしょ」

里緒奈「今日はあるの。水曜だけど」

良二「え、じやあどうすんの？」

里緒奈「もう、学校行かない。風邪ひいたことにする」

と、自室に戻ろうとする里緒奈。

良二「ちょっと待ちなつて」

良二は急いで里緒奈を止めようとして、
フライパンに手を引っ掛ける。

良二「熱つ」

良二は手を押さえる。

本木水萌（35）が入ってきて、

水萌「洗濯終わつたよ。：何してんの？」

良二「火傷した。：つてのは、良いんだけど、里緒奈が学校行きたくないって」

水萌「え？」

良二「風邪ひいたことにするつて。テニス部の朝練遅刻らしくて」

水萌「もー。またか。学校行くよう言つてくる」

良二「ごめん。よろしく」

本木彩（13）が入ってきて、

彩「おはよう」

良二「おはよう。ご飯今できるから」

彩「お姉ちゃん、布団で二度寝し始めたんだ

けど」

水萌「里緒菜、テニス部の朝練遅刻したから、体調不良ってことにするつて」

彩「また？」

水萌「また。もー」

水萌、部屋から出ようとして、

良二「あ、ごめん。俺もう行かなきや」

水萌「オッケー。あ、私、今日夜勤だから。

夜ご飯、冷蔵庫中入れとくから

良二「はいよ。分かった」

水萌、部屋を出ながら、

水萌「里緒奈！ 早く起きてー！」

○本木家・外観（朝）

家から出てくる良二と彩。

彩「じゃあ、行つてくるねー」

良二「気をつけて」

別の方向へ歩くふたり。

○飯田商事・企画課

パソコンを打つ良二。

岡本和志（32）がオフィスチエアを
転がして近づき、

岡本「（小声で）本木さん」

良二「どうしたの？」

岡本「これ」

岡本、ファイルを出す。

良二「これ？ ああこれなら、総務と人事に

照会かけてまとめるだけだよ」

岡本「知つてます」

良二「知つてるんだつたら、大丈夫だね」

良二がファイルを差し返す。

岡本、ファイルを受け取らず、手を後ろにやる。

良二「ん？」

岡本「いやあ、ここ。すいません」

岡本がファイルを指でさす。『提出期限 10月2日』とある。

良二、壁に貼つてあるカレンダーを見て

良二「今日つて」

岡本「3日です。3日」

良二と岡本は顔を見合わせる。

× × ×

良二、雛席に座る服部直也（48）の横で立つ。

服部「えつと、これさ、総務と人事に聞かないとできないよね」

良二「はい」

服部「んで、聞いたら3日くらいかかるよね」

良二「はい」

服部「んで？」

良二「すいません」

服部「すいません。じやなくてさ。いつまで

だつけ？この資料」

良二「2日、までです」

服部「今日は？」

良二「：3日です」

服部「今から人事と総務に作つてもらつたら

いつできんの？」

良二「：3日後です」

服部「はあ、なんで管理できなかね」

良二「すいません」

服部「すいません、は、もういいよ。どう

するかつて聞いてんだよ」

良二「先方に謝つて、待つてもらうようお願

いします」

服部「オッケーしてくれんの？」

良二「えー、1回あたってみます」

服部「もういいわ。お前が、今日中に何とか
しとけ」

良二「すいません」

良二は気まずそうに、席に戻り、岡本
にファイルを渡す。

岡本「えっと」

良二「相手さんには、話しあとから。取り
敢えず、総務と人事に聞いて」

岡本「さーせん」

良二、電話の受話器を取つて、番号を
押していく。

○飯田商事・企画課（夕）

良二、電話で、

良二「すいません。お手数おかけしますが、
よろしくお願ひします。：失礼します」

良二、電話を置いて溜息を吐く。
課内でチャイムが鳴る。

岡本、まとめた荷物を持って、

岡本「お疲れっすー」

良二「あ、お疲れー」

本木に服部が近づいて、

服部「ちょっといいかー」

良二「え、は、はいー」

○飯田商事・ミーティング室（夕）

良二と服部が対面で座る。

良二「えっと、つまりー」

服部「クビだよ。つまりー」

良二「そんな、困りますー」

服部「俺も困るよ。いきなり、一人肩叩けつて言うんだもんなー」

良二「どうして、自分なんですかー」

服部「どうしてって。分かるだろ。今日だつて仕事の期日守れないしー」

良二「期日つて、あれだつて岡本くんの担当

ですしー」

服部「担当つてなあ、お前のほうが年数も全然上なんだから、管理しないとダメでしょー

良二「…管理つて…管理職でもないのにそんなの」

服部「そういうところだろ。クビにされるの。もう、これ以上話しても、埒あかないから行くわ。ああ、引き継ぎだけよろしくな。有給は引き継いでから消化してな。じやあ」

服部、ミーティング室を出ていく。

呆然と座る良二。

○本木家・リビング（夕）

そろりと部屋を確認しながら入る良二。

水萌が、ソファでテレビを見ている。

良二「ただいま」

水萌「おかえりなさい。早かつたね」

良二「いや、定時だよ」

水萌「でも、いつも遅いからさ、何かあつたかなーと思つて」

良二「何もないよ。むしろ定時なんだから。

これが普通だつて」

水萌「そつか。ならいいけど」

良二「…里緒奈と、彩は？」

水萌「友達の家。遅くならないようには言つてあるけど」

良二「里緒奈、学校行つた？」

水萌「午後からね。体調良くなつたつて体で」
良二「ていね。そういえば、今日夜勤つて言つてなかつた？」

水萌「いやあ、シフト見間違えてたみたいで。今日は、日勤でさ。あの後すぐ行つたのよ」

良二「そつか、間に合つたならよかつたけど」

水萌「ご飯、作つてるから。チンして食べて」
良二「おお、ありがとう」

良二、キッチンの周り、冷蔵庫を開ける。

良二、手を止め冷蔵庫を閉める。

良二「水萌、ゴメン。ちよつといい？」

水萌「なに？」

良二、水萌の前に座つて、

良二「あのさ、今日早く帰つてきたじやん」

水萌「うん。たまには早く帰つてきたつて」

良二「そう、久々に早く帰ってきたんだけど」

水萌「なに？ やつぱり、何かあつたの？」

良二「なにかつて訳じやないんだつたら、そ

水萌「なにかつて訳じやないんだつたら、そ
んな勿体ぶらずに早く言えればいいじゃん」

良二「いや、そうなんだけど」

水萌「もう！ ジやあ、何言つてもそうなん
だつて、言うことにするから、早く言つ
て！」

良二「分かつた。実はさ…」

水萌「実は？」

良二「会社クビになつた」

水萌「そうなんだー。えつ？」

良二「やっぱ、そうなんだーじやすまないよ
ね」

水萌「そうじやなくつて、私もなの。病院ク
ビになつた」

良二「なんだ？ え？」